

二〇二二年度 第一回 入学試験問題

適性検査Ⅰ (三鷹型)

試験時間 四十五分

注 意

- 1 問題は **1** のみで、**3ページ**にわたって印刷してあります。
- 2 声を出して読むはいけません。
- 3 答えはすべて解答用紙に明確に記入し、**問題用紙と解答用紙を提出してください。**
- 4 答えを直すときは、きれいに消してから、新しい答えを書いてください。
- 5 **受験番号**を解答用紙の決められたらんに記入してください。

佼成学園女子中学校

受験番号

1

次の「詩」と「文章」を読み、あとの問題に答えなさい。
(※印の付いている言葉には、本文のあとに「注」があります。)

〔詩〕

樹き どうかして
川崎かわさき 洋ひろし

なんとかお前に交わる方法はないかしら
葉のしげり方

なんとかお前と
交こう又さするてだてはないかしら

鳥

お前が雲に消え入るように
僕ぼくがお前に

すっと入ってしまうやり方は

ないかしら

そして

僕自身も気付かずに

身体からだの重みを風に乗せるコツを

僕の筋肉と筋肉の間に置けないかしら

夕陽ゆうひ

教えておくれ

どうして

坂の上に子供達が集まって

おまえを視みるのか

どうして

子供達は

小さな頬ほおの上に忙いそしく手を動かして

まるで

夕陽をそこにすりこむようにして

其処そこに

歌かおしやべりか判わからない喚声かんせいが

渦うずを巻くのか

日の暮れ方を教えておくれ

森の色の変かわり方を

蜻蛉とんぼの羽の透すきとおり方を

土のしめり方

粗あらい草の匂におい方を

教えておくれ

(詩集『木の考え方』)

〔文章〕

私は長いこと、若い人の投稿詩を読んだ経験がありますが、その投稿詩で「^①鳥のように飛びたい」という言葉を頻繁に目にしました。人間の気持ちの中には確かに自由な飛翔願望があり、とくに若い人の間にそういう欲求の強いことはわかりますが、「鳥のように飛びたい」という表現では、あまりにも、ありふれていて切実感がありません。

そこで、^②引用詩の第二連を見てほしいのです。この連は、飛翔願望そのものをうたったものではなく、鳥への融合を願っている詩ですが、これを、空を飛びたいという普通の表現に、仮に対比させてみますと、そういう普通の表現の及びもつかない方法で、飛翔力を人の筋肉の中にも取り入れることができるような、そんな幻想に導かれてしまいます。「身体の重みを風に乗せるコツ」を筋肉と筋肉との間に置くことができたなら、本当に身体が宙に浮くのではないかという気がします。

この連の魅力は、浮力を筋肉と筋肉との間に置きたい、という丁寧な手続きにあります。「飛びたい」と願う前に、飛ぶことに必要な手続きをとろうとするこの詩人の、飛翔への、あるいは空を飛ぶことができる生物たちへの、独特な愛着が、こういう丁寧な表現を生み出したのだと私には思われます。

「空を飛びたい」という願望を聞かされるだけのとき、私たちは「ああ、そうですか、どうぞ」としか言えませんが、川崎さんの詩を読む

と、私たちは、飛ぶために努力が要するというを感じ、飛ぶことに、もっと強い愛情さえ感じます。

詩は思いを述べるもの、というふうに普通、思われています。たしかに詩は、ある思いが動機になって書かれるものですが、それが単に希望を述べるとか、嬉しい悲しい淋しいと言うだけでは、それを読んでもくれる人の共感が得られないのです。読者は、作者の述べている願望や喜怒哀楽の感情の直接的表白にたいしては、「そうですか」と言うほかないのです。

人間の精神活動は、知・情・意の三つに分けられますが、私たちは他人の感情や意志については、その人の感情や意志の理由がわからなければ賛成も反対もできません。つまりある人が怒っているとか悲しんでいることの理由がわかって、はじめて私たちは同情することも可能になるわけです。

怒ったり悲しんだりしている理由を、その当人が、他人にもわかるようにしてはじめて共感の条件ができます。

言いかえますと、ある感情に包まれたり、ある意志を持っている人は、それをそのまま情意の赴くままに述べるのではなく、一度、他人の判断が可能になるようにしなくてははいけません。

つまり、「知」的判断ができるようにすべきです。

表現の世界である詩の場合でも当然そうあるべきはずなのに、なぜか、詩歌の場合に限って、作者は自分の思いを単に述べるだけで、それが、他人の共感を得るはずだと錯覚されています。

詩の作者と読者との間に共感が成り立つためには、作者が^③単に思
いを述べるだけでなく知的判断をどこかに示してはいてはいけません。
その知的判断の面白さが読者の共感を誘うのだということを知得
てほしいと思います。

単に〈空を飛びたい〉と言われるだけでは、〈そうですか〉とか〈ど
うぞ〉とか言うほかに読者でも、〈身体の重みを風に乗せるコツを
僕の筋肉と筋肉の間に置けないかしら〉の場合は、これが幻想的なこ
ととわかっていても、そこに一つの判断が示されていますから、読者
は、情意を押しつけられることなく知的判断の地平に立つことができ
ます。

一人の読者である私は、なるほど、身体の重みを風に乗せるコツを、
筋肉の中に取りこめば飛べるわけだなあ、そのようにして実際に飛べ
たらいいなあ、飛んでみたいなあ、というふうには、知的判断を基礎に
して、情意を肯う方向に進むことが、無理なくできるわけです。詩
と知情意とのかわりを、そのように理解してほしいのです。

(吉野 弘 『詩の楽しみ』)

〔注〕

※頻繁…しきりに行われること。

※飛翔…空高く飛ぶこと。

※融合…異なるものが一つにとけ合うこと。

※表白…言葉に表すこと。

※情意の赴くままに…気持ちのままに。

※肯う…承知する。

〔問題1〕——線①「鳥のように飛びたい」という表現が共感を得に

くいのはなぜですか。三十字以上四十字以内で説明しなさい。

〔問題2〕——線②「引用詩の第二連」の中の表現がすぐれているの

はなぜですか。三十字以上四十字以内で説明しなさい。

〔問題3〕——線③「単に思いを述べるだけでなく知的判断をどこか

に示してはいてはけません」ということについて、あなたが考えたことを具体例を挙げながら三二五字以上三五

〇字以内で説明しなさい。

〈きまり〉

○題名は書きません。

○最初の行から書き始めます。

○段落を設けず、一まずめから書きなさい。

○、や。や」などもそれぞれ字数に数えます。これらの記号が
行の先頭に来るときには、前の行の最後の字と同じまずめに書
きます。

○。と」が続く場合には、同じまずめに書きます。この場合、」
で一字と数えます。